

## 〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉再考

—子ども着に仕立て直される以前の衣裳はどのようなものだったか—

永津 禎三

「琉球美、造形研究会」で第3回目となる「紅型衣裳見学会」を2025年12月11日に開催し、沖縄県立博物館・美術館に於いて、同館所蔵の〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉を閲覧し、ここでの考察を、小論考『紅型子ども着から考える』として2026年1月7日に纏めた。

その後、和裁士 松本ヨシ先生を囲んでの「ゆんたく会」を2月と3月に開催し、〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉を再考するための、新たな知見を得ることが出来たので、この小論に纏めてみたい。



前小論考と重複するが、まずは、『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいろとかたち展図録』（2012年）に掲載されている〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉の解説文を紹介する（英文略）。

### 39 白地震に鶴松梅楓模様子ども着

苧麻、両面染、大模様一大柄、白地型 19世紀 丈53.0×裾29.0cm 沖縄県立博物館・美術館

反物の布一枚中で後身頃が仕立てられている。このような子ども着は一つ身と言われ、乳幼児が着用する。模様は白地型で、鶴と松を霞にのせ、梅と楓を添えている。国宝・琉球国王尚家関係資料にある紅型衣裳に類似する模様である。この作品は、尚家資料とは、布素材が異なり、配色や地色も違うが、苧麻の素材の白さが模様を引き立たせている。鶴の模様が背中中で上下に反転しており、おそらく、ここが肩山であったと思われる。大人の衣裳を子ども用に仕立て直されている。この子ども着は、身分の高い家柄の子弟が身につけたものである。（YI）



〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉

この解説文にある「国宝・琉球国王尚家関係資料にある紅型衣裳」は〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉と考えられるため、「琉球尚王家秘宝展」（西武美術館、1984年）の図録に掲載されていた図版（前）と「復帰20周年記念特別展 海上の道—沖縄の歴史と文化—」（東京国立博物館、1992年）の図録に掲載されていた図版（後）を参考にし、〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様を復元してみた。やはり重複することになるが、その図版も再掲する（次ページ）。



〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣装〉

図A 〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の図版（後）から型紙一つ分の模様を作成した

図B 〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉から拾った図柄

図C（図A）の上に（図B）を乗せた

ここに可能な限り拾える小部分を配し（時には左右上下を反転させて）〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様を復元してみた。



図A



図B



図C



〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様

そして、この〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉型紙一つ分の模様を〈黄平絹地鶴に松竹梅紅葉模様紅型胴衣〉の模様構成に合わせ、〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉想像図（次ページ）を作図した。

当初は、この〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉が〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉に仕立て直される以前の衣裳であると考えた。

しかし、胴衣は脇下の部分が曲線に詰められているので、反物に鉄が入れられていたら、胴衣から子ども着に仕立て直すことは出来ないと考えられる。仕立て直される以前の衣裳ではなく、同じ模様の反物を使った衣裳にすぎないということになる。

そこで、胴衣ではない〈白地震に鶴松梅楓模様衣裳〉想像図（次ページ）も『沖縄復帰40周年記念 紅型 琉球王朝のいとくたち展 図録』に掲載されているいくつかの衣裳を参考にして作図した。



〈白地震に鶴松梅椿模様衤衣〉想像図

この〈白地震に鶴松梅楓模様衤衣〉であれば、〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉に仕立て直される以前の衤衣として成立すると考えたのである。

このような経緯があったので、第26回（2月15日）と第27回定例研究会（3月22日）で、和裁士の松本ヨシ先生にお願いし、着物の仕立てについて詳しく伺うために「ゆんたく会」を開催することにした。

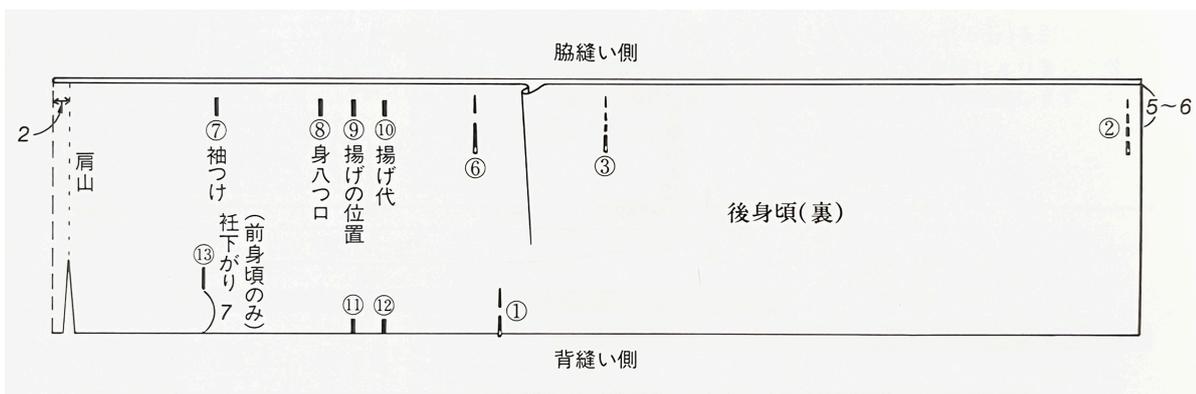
その第27回に松本先生に同行してくださった和裁士の照屋雪江さんから、この〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉は、大人用衤衣の袖の生地を使って仕立て直されたものではないかとお指摘いただいた。子ども着が50cm程度の丈であれば、振袖の袖で仕立ては可能であろうとのこと。

初めは、何故、袖でなければいけないのか理解できなかったが、仕立ての手順を見せていただき、やっと理解出来た。

下記の大人用衤衣の「仕立て方」の図で説明したい。



〈白地震に鶴松梅椿模様衤衣〉想像図



図D 村林益子『図説きもの仕立て方』紫紅社1990年より

図Dの左下、肩山に切り込みがある。これは「衿肩あき」と言い、着物の背中心、肩山の位置に襟を付けるために入れる切り込みで、通常9.2cm程度である。反物の幅いっぱいを用いる一つ身裁ちで、更に肩山が背に来る意匠の子ども着へは、この切り込みがあるため、大人用衣装の見頃の生地から仕立て直すことは出来ない。



〈白地震に鶴松梅楓模様衣裳〉(振袖) 想像図

〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉は、丈が53.0cmである。後身頃の真ん中より少し下に反物の肩山部分があるので、この子ども着に仕立て直せるのは、83cm(30.0cm + 53.0cm)程の袖丈がある振袖衣裳だったのであろう。そのような振袖衣裳とはどのようなものだったかを想像し〈白地震に鶴松梅楓模様衣裳〉を作図し直してみた。

〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉に仕立て直される以前の衣裳がこのような振袖衣裳であった可能性は高い。しかし、最初に作図した〈白地震に鶴松梅楓模様胴衣〉想像図の方が、衣裳の形と模様のバランスが優れているように思えるのも事実である。

紅型衣装見学会で〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉を閲覧し、印象的だったのは、この紅型が非常に美しい型で繊細に染められており、使われていた顔料も最高の素材だったことだ。

おそらく、この子ども着を着用していたのは、王族の子弟だったのだろう。そうであれば、仕立て直しではなく、新しい紅型生地から仕立てられた可能性も充分にあると思えるのである。

### 〈白地震に鶴松梅楓模様子ども着〉再考

—子ども着に仕立て直される以前の衣裳はどのようなものだったか—

著者：永津禎三

私家版

2026年3月28日発行